

放火火災の実態とその防止対策 第3回

総務省消防庁予防課長 小林恭一

[どこのどんな物に放火されるか]

建物火災の場合、「共用部分」に放火される場合が23.0%（平成8年 以下同じ）で最も多く、次いで「倉庫・物置」（22.0%）、「屋上、ベランダ、屋根裏、床下、外周部等」（18.0%）の順になっています。当然のことながら、「外部から接近しやすいところに放火される」ということです。

建物火災の場合、放火される物として最も多いのは「繊維類」で36.5%、次が「屑類」で20.2%です。手近な布や紙屑などが火をつけられていることがうかがえます。放火されやすい場所のデータと合わせると、外部から接近しやすいところに布や紙屑などがあると放火されやすい、ということがわかります。「建物の周りに燃えやすいものを放置しない」というのが放火対策の基本だということです。

ただ、放火される物の第3位が「引火性液体類」（7.2%）となっていることには留意しなければなりません。ガソリンや灯油などを持ち込んで火をつけることも結構ある、ということだからです。

建物火災以外の場合は、放火される場所と物として最も多いのが「建物の敷地内にある繊維類、屑類、枯れ草、郵便・新聞受けなど」で21.0%、2番目が「自動車等の外周部」（10.4%）、3番目が「道路に放置された繊維類、屑類、ゴミ箱等」（9.1%）となっています。道路上のものに火をつけるより、建物敷地内に入り込んで火をつける方が多いということに注意しなければなりません。

また、「自動車等の外周部」として車やバイクのボディカバーがねらわれています。このようなデータを見ると、自動車やバイクのボディカバーを燃えにくいものにする（防災化）と、放火による被害が少なくなることも良く理解出来るでしょう。

[放火犯のプロフィール]

平成2年から6年までに放火犯として捕まった3212人について、そのプロフィールを見てみましょう。

年齢別に見ると、「40～49歳」が22.5%で最も多く、次いで「20～29歳」の21.7%、「30～39歳」の19.1%となっており、働き盛りの壮年層が多いことがわかります。

職業を見ると、圧倒的に多いのが「無職」の39.2%です。職種的にはいろいろですが、注目すべきは、第4位に「中学生」（4.5%）が入っていることで、「高校生」（2.2%）、「大学生」（0.6%）に比べて格段に多くなっています。ストレスのたまりそうな

「予備校生」が0.1%と少ないのも、意外と言えば意外です。

動機から見ると、「恨み・仕返し」の26.5%が圧倒的に多く、第2位が「精神障害・薬物・酩酊」(12.7%)、第3位が「遊び・スリル」(8.9%)、第4位が「痴情・嫉妬」(4.6%)、第5位「自己顕示」(3.8%)と続いています。アメリカなどで多いと言われる「保険金目当て」は2.4%で第6位です。

「この家に火をつけよう」とターゲットを決めて放火する例が意外に多いように見えますが、このデータが放火犯として捕まった人の統計だということを忘れてはなりません。動機のはっきりしている放火犯の方が捕まりやすいでしょうし、放火も1件限りのものが多いでしょう。これに対し、いわゆる「愉快犯」の場合は、捕まりにくいし、捕まるまで何度も放火している可能性が高いのです。放火件数に占める割合で見ると、かなり違った結果になると思います。